

## 四万十市教育研究会教育講演会あいさつ

令和元年8月20日（火）9時：四万十市立文化センター大ホール

おはようございます。今日は、四万十市教育研究会の教育講演会が市内小中学校教職員を一同に会して、盛大に開催されますことに心よりお慶びを申し上げます。

今年度は、平成から令和に元号が変わった歴史的な節目の年。気持ちも新たに各学校共にスタートし、今に至っていることと思います。グローバル化や情報化、少子高齢化が進み、社会の変化が激しい中、これまでも増して、人を育てること＝教育は、何物にも変えることのできない大切な営みで、私達の役割はとても重要だと思っています。どんな時代になっても、通用し活躍できる人、未来社会を自分らしく生き抜く人を育てるため、義務教育小・中学校では、やさしく、かしこく、たくましく、知育徳育体育のバランスを大切に、これからの教育活動に更に知恵を出し合い、汗を流し合って頂くようお願いします。

夏休みも終盤になりました。来週から始業の学校もありますが、心も体もリフレッシュ充電して、2学期以降のエネルギーに上手く切り替えられるようにと思っています。

そういう意味で、8月9日から15日までは、去年から導入した学校閉庁日でした。この夏、皆さんは、どのような過ごし方、人生の楽しみ方をしたでしょうか？

私事になりますが、眼の手術を、初めて経験しました。医者の説明や手術の方法、手術前後の看護師や病院の対応等、普段とは違った貴重な体験、気づきがありました。

閉庁日に入った直後の9日に休暇を取り、連休も活用して、京都・滋賀を旅行しました。中村獅童さん演じるスーパー歌舞伎を初めて観劇し、世界遺産比叡山延暦寺を散策し、琵琶湖クルーズを楽しみました。歌舞伎の伝統を守りつつ以前観た歌舞伎とは違うスーパー歌舞伎の現代的な芸術性、荘厳な歴史の重みを感じる延暦寺や琵琶湖の壮大さを肌身で感じ、また、生きるエネルギー、仕事への意欲・アイデアをもらった今年の夏でした。

改めて、学校の教職員は、大多数の方が、小学校、中学校、高等学校、大学・専門学校と進み、また、仕事として再び学校という世界に入り込んでいく。さらに、教職は、仕事として幅広く多彩な業務があり、授業のこと、行事のこと、子どものこと、中学校の先生に至っては、部活動のこと等を、常に同時並行的に構想し、準備し、実行していく流れがあります。そこは否めない現実があると思われまます。だからこそ、時には、自分をみつめる時間、一人の人間としての生き方を考え磨く時間や視点が必要であるように思います。

教師である前に、人間として、社会人として、家庭人としての生き方、人生があります。それは、学校という狭い世界、教職という専門的な仕事を越えて大切にしたいものです。より豊かな人生、より豊かな人間となっていくには、例えば、いろいろな人との会話、読書、旅行、映画、コンサートや演劇、スポーツ、手芸や工芸、美術館や博物館などといった、心に、頭に、身体に、何かしらの感動や喜び、刺激や学びが必要だろうと思います。教養や文化の世界を広げ深め、教職・学校とは異なるものの見方・考え方、多彩な体験や経験をすることで、人間的な成長や人間的な幸せを感じ、それがまた教育や授業、つまりは教職の仕事にも還元されてくる。私自身は、そんな思い、そんな考えでいます。

四万十市には、幡多地区には、高知県には、豊かな自然、美味しい食べ物、温かい人情があります。ぜひ、その良さも、時間を作って満喫して欲しいと思います。

人の生き方・価値観は様々ですが、教職としての仕事はしっかりとこなしつつ、時間に余裕をつくって、また、プライベートな時間を大切に楽しみながら、メリハリのある生活、ワーク・ライフバランスのある教職人生を送って欲しいと思っています。5月の組織総会でもふれましたが、教育委員会として、「学校における働き方改革等に向けて」次の5点

1. 時間外における業務従事時間の把握と記録 その結果に基づく改善方策と改善指導
2. 週1回もしくは月2回以上の定時退校日の設定
3. 最終退校時刻の設定⇨基本「四万十市の学校は午後9時には電気が消える」を当たり前
4. 週2日以上の子活動休養日の設定
5. 学校閉庁日の設定

を提示し、これらの実態把握をしながら趣旨の実現に向け働きかけています。まだまだ市・県共に教育委員会として、条件整備や手立ての整っていないこともあります。管理職のリーダーシップのもと、意識改革や取り組み方改革も進めていただきながら、新しい時代に対応する学校への改善の大切な一環として「学校における働き方改革」「より生きがいと働きがいのある教職員としての生き方」の具現化に努めて欲しいと思います。

さて、教職員の本務の話に移ります。この夏休み中、7月31日午後5時に、今年度の全国学力・学習状況調査の結果が公になりました。

今年度の全国学力調査は、来年度小学校、再来年度中学校で完全実施される新学習指導要領に照合し、去年までの主として知識を問うA問題と、主として活用を問うB問題を、今年度から一体化して実施されました。また今年初めて、中学校の英語が実施されました。

四万十市においては、小学校は、国語が全国平均正答率比（以下「全国比」）+7.1p、算数が全国比+5.6p。国語、算数共に、全ての問題種で5年連続の全国平均超え＝安定的な高い学力水準を達成し、高知県教育振興基本計画の目標値全国比+3p以上を優に達成しました。また、同時に公表された全国47都道府県の正答率に四万十市をあてはめると、国語・算数共に、全国4位相当以内に入り、四万十市教育振興計画の今年度までの目標である「全国平均を超えて、なおかつ全国上位」を国語は2年連続、算数は3年連続達成することができました。

中学校は、国語が全国比+6.0p、数学が全国比+5.4p、英語が全国比+2.3pで、国語と数学については、平成19年度の調査開始以降の最高値を達成し、高知県教育振興基本計画の目標である全国比超えを大きく上回って達成できました。因みに、最も結果として落ち込んでいた平成24年度のAB問題平均値と比較すると、国語科で13.1pアップ、数学科で24.6pアップの飛躍的な上昇＝学力向上を遂げたこととなります。小学校と同じく、公表された全国47都道府県の正答率に四万十市をあてはめると、国語、数学、英語揃って、全国3位相当以内に入り、四万十市教育振興計画の今年度までの目標である「全国平均を超えて、全国上位を目指す」にまで到達することができました。

重ねて、8月校長会で、同じ4月に実施をした標準学力調査の結果について、資料として提示をし、教育研究所から、結果分析の説明も致しましたが、今年度は、中学校2年の英語科を除いて、小学校3年生から中学校2年生まで、全ての学年、全ての教科で、全国平均を超える安定感とつながりを感じる望ましい結果を得ることができました。

これらの調査結果は、学力の一部分とはいえ…、好結果が出たことは嬉しいことで、小学校14校、中学校11校、計25校が、校長・教頭を中心に、研究主任、教務主任等がリーダーシップを発揮し、ここにお集まりの教職員一人一人の真摯な頑張りと、事務職、用務員含めてみんなが参画するチーム学校により、小中の校種や学校規模に関係なく、揃って、学力向上について、具体的な目標と方策をもって地道に取り組んできた証。教科会や各種担当者研修会、指定校研究会等、学校を越えて、学力向上や授業改善について研修・協議を重ねてきている証。また、これら先生方の指導に応じて、児童生徒も落ち着いて日々の授業や帯タイム、家庭学習に取り組んでいる証と捉えています。

学力の定着と向上は、児童生徒の夢や目標、希望する進路の実現につながる学校の大切な営みです。今後も、この結果に満足することなく、教育委員会と学校とが連携を図り、各学校及び児童生徒一人一人への学力の定着と向上の取組を、たゆまなく地道に積み重ねていくよう宜しくお願いします。

A問題とB問題、知識・理解・技能と思考力・判断力・表現力が一体となった学力調査の問題となった今、そして、「何ができるようになるか」を目標としながら、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」を一体で育てる新しい学習指導要領に向かう今、二学期以降、さらに求められる学力が確かに達成できるよう、授業改善の話に少しふれたいと思います。

既に、各学校で校内研修をしたり、校外の研修や教育雑誌、マスコミ等で取り上げられているように、新学習指導要領の目指す授業は、「主体的・対話的で深い学び」の実現、「教科等の見方・考え方」を働かせ育て生かす授業、そして、繰り返しになりますが、「何を学ぶか」と「どのように学ぶか」を巧く往復させながら、「何ができるようになるか」を目指す資質・能力ベースの授業が求められています。この単元、この教材で付けたい教科等の見方・考え方って何だろう、読み書き計算や基礎基本となる内容等の習得学力と思考力・判断力・表現力等の活用学力を、一時間の授業を通して、単元を通して、学期や年間を通して、どう確実に、豊かに身に付けるようにするか。そして、授業スタンダードによって、授業の過程を明確にし、指導方法や学習活動に工夫を凝らしながら、どの子も興味・関心・意欲をもって楽しく学びがいのある授業づくり、どの子も学習に取り組める学び方を育てる授業づくりを究めて欲しいと思います。言うまでもなく、「主体的・対話的で深い学び」の主語は、学習者である児童生徒です。子ども達にとって、今日の授業は、主体的な授業であったのか、対話的な授業になっていたのか、深い学びのある授業であったのか等々、今一度、キーワードとして示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現、「教科等の見方・考え方」を育てる授業、「何を学ぶか、どのように学ぶか、何ができるようになるか」＝資質・能力を育てる授業を、それぞれに具体的に考え、吟味しながら、これからの授業づくり、授業を介した学力づくりに繋げて欲しいと思います。

また、二学期開始以降の学校訪問や各種研究会・研究発表会等での授業を期待して参観させていただきます。

さて、本日の教育講演会は、昨年度より小学校で、今年度より中学校で、教科化された道徳をテーマに、日本の道徳教育界の第一人者、横山利弘先生にご講演をして頂きます。先生は、高知県とも大変深い縁があり、平成3年度、当時の文部省教科調査官として着任以降ずっと、毎年定期的に高知にいらしていただき、身近なところで言うと、幡多地区道徳教育研究大会（幡道研大会）の講師など、様々な研修会や講演会等で、30年の長きにわたり、高知の道徳教育の推進にご指導ご助言を頂いております。

私も、若い頃から横山先生にはご指導をいただいております。懐深く含蓄のあるお話には、いつも感銘を受けています。先生の話は、単に道徳教育の世界のみならず、聴いている皆さんの教師としての、人間としての生き方、心の中にきっと何かしら響くものがあるものと思います。道徳の教科化に向けて、昨年度、本市が取り組んだ「わがまちの道徳教育推進事業」の一環として、四万十市校長会・教頭会で、講師としてお招きしたのに続いて、今年度は、市内全教職員が、日本の道徳教育の歴史と本質、道徳授業の神髄と魅力を熟知した横山先生から、道徳教育・道徳授業の在り方についてお話を聞けることは、大変貴重で、意義あることと期待をしているところです。先生どうぞよろしくお祈りいたします。

また、講演会に先立ち、四万十市生涯学習課川村慎也係長より、土佐の小京都中村550年祭のあった昨年度、台風接近のため実施できなかった「四万十市の歴史」について、講話をして頂きます。ふるさとの歩みや人物、歴史的な宝について我々教職員が学習し、四万十市が進める「ふるさと教育」、四万十市の素晴らしさを知り、ふるさとに愛着を持って未来に生きる子ども達を育てていく教育に繋げて欲しいと思います。

終わりにになりましたが、四万十市の子ども達が、今後益々、健やかに豊かに成長していくように、これからもよろしくお願い申し上げ、開会の挨拶とします。

本日はどうぞよろしくお祈りいたします。